

Mark Amsler: *Etymology and Grammatical
Discourse in Late Antiquity and the
Early Middle Ages.*

John Benjamins Publishing Company,
Amsterdam/Philadelphia, 1989, pp. x+280

水 落 健 治

われわれが、古代や中世の人々の言語に関する著作を読んでいて最も奇妙に感ずることのひとつは、様々な事項の「語源」による説明 (etymologia) であろう。われわれは、たとえばアレクサンドリアのフィロンが旧約聖書に登場するイスラエルの人々の名前の語源の説明を延々で行なったり (*De mutationibus nominum*), アウグスティヌスが「ことば (verbum) は空気の振動 (verberare) に由来する」(*De magistro* 5. 12) と語ったり、あるいは Isidorus が *Etymologia* の中で様々な文学ジャンルの起源を論じて「散文 (prosa) は『流出する』(quod sit profusa) に由来する」などと大真面目で論じたりするのを読むとき、それらの説明の中に何か重要なことが隠されているのではないかとの思いを持ちながらも、ある種の当惑を感じ、それらの部分を読み飛ばしてしまいがちなのである。

本書は、とかくこのように敬遠されがちな “etymologia” に焦点をあてつつ、古代末期から中世初期に至る言語思想を論じた労作であり、この時代に関する新たな展望を与えてくれる刺激的な書物である。著者 Amsler は、アメリカ Delaware 大学で中世やルネッサンス期の Semiotik を専攻する研究者であり、これまで “Literary Onomastics and the Descent of Nations: The Example of Isidore and Vico” (1979), “Classical Etymology, Authority, and Grammatical Discourse” (1986)

などの論文を発表して来た。したがって本書は、著者の積年のまとめともいべきものであり、われわれは本書の中にアメリカの古典研究や中世研究の新たな潮流の成果を見出すことができよう。

ヘレニズム期からローマ共和制期にかけての時代、〈ことば〉に対する接近の仕方にはふたつの大きな潮流があった。その第1は、特定の言語 (e. g. ラテン語) をひとつの有機的完結体として捉え、その言語内の様々な現象を、外からの規範を持ち込むことなく、体系内部において説明して行こうとする立場である。この立場は近代言語学や文法学に連なるものであり、様々な言語現象を指示する〈メタ言語〉 (e. g. 「名詞」 *nomen*, 「活用」 *coniugatio, declinatio* etc.) を使用することを特徴とする。第2の立場はこれと異なり、個々の〈ことば〉 (単語) のもつ「音」や「文字の形」に注目する。そして〈ことば〉に関する議論はもっぱら、これら〈ことば〉のもつ質料的側面から、そしてしばしば外からの規範 (神話など) を持ち込むことによって行なわれる。ここでは、単語を構成する音節を延長・縮小すること、1個の単語を複数に分割したり、複数の単語を1個に結合したりすることが自在に行なわれ、その結果、特定の単語の起源や意味が神話などとの関連で、なかば「こじつけ」のようにして説明される。著者はこれら二つの潮流を、“technical grammar”, “etymological (exegetical) grammar” という名で呼ぶ。そして古代から初期中世に至る言語理論の展開を、これらふたつの言語理論の潮流の複雑な絡み合いと抗争の歴史として捉えようとするのである。

本書は4章から成り立っている。第1章: Etymology and Discourse in Late Antiquity では、古代末期における“etymological grammar” と “technical grammar” との関係をめぐる問題状況が、まず概括的に明らかにされる。著者はまず、“etymological grammar” の典型——文法学のふたつの潮流の緊張関係の中で“etymological grammar” を大胆に取り入れた典型——として Varro の文法学を取り上げる (pp. 24-31)。しかる後に、紀元前4世紀からヘレニズムの時代に至るまでの言語に関するこれらふたつの接近方法の緊張関係と、ヘレニズム時代における〈メタ言語〉の成立 (p. 18) を契機とする“technical grammar” の創からの“etymological grammar” に対する批判の状況を明らかにして行く。プラトンの『クラテュロス』はこれらふたつの言語理解をめぐる論争と捉えられるし (Cratylus = etymological grammar/Her-mogenes = technical grammar/Socrates = 中間の立場)、ストアとアリストテレスと

の言語理解をめぐる論争や, Quintilianus による “etymologia” の過剰使用に関する批判 (「etymologia の使用は本文の意味が不明の時のみに限定すべきである」), Sextus Empiricus による懐疑派の立場からの etymologia 批判, さらには Augustinus, *De dialectica* c. 6 における “etymologia” の恣意性批判なども, 言語をめぐるこれらふたつの立場の緊張関係ないし論争の現われと考えられるべきことを著者は主張する (pp. 31-55).

続く第2章: Technical and Exegetical grammar before Isidore では, “etymological grammar” と “technical grammar” との緊張関係が, 帝政期ローマの版図拡大と帝国内部における伝統的ローマ宗教とキリスト教との抗争の中で展開して行ったその過程が詳述される。著者はまず, ローマ帝国の版図の拡大に伴ってラテン語が次第に “barbarismus” に侵食され, それに応ずる形で “latinitas” の概念が成立したことを述べる。そして次に Donatus (4c. 中頃) から Priscianus (6c. Constantinopolis) に至る世俗的文法学 *ars grammatica* の発展がこのようなラテン語の Barbarismus 化への対抗手段として生起しつつも次第に etymologia 化して行くありさまを述べ, 帝国内部では伝統的ローマ宗教との抗争に明け暮れていたキリスト教徒たちが, 対蕃族との関係においてはローマ文化 (= latinitas) の担い手たらざるを得なくなり, その必然的結果として Donatus らの世俗文法学が単に異教徒のみならずキリスト教徒の中にも受容され, キリスト教徒が蕃族に対してローマの世俗文法学を教授するに至る事情を詳しく語る (pp. 57-82)。

次いで著者は, このような文法学の展開の対極にある考え方として, キリスト教内部で展開された “Sacred Onomastics” の考え方を採り上げる。これは, 特に旧約聖書の人名や地名を etymological な仕方で解釈する方法であり, 紀元6世紀以前のキリスト教文書の様々なジャンル (宗教詩, 歴史記述, 聖書注解, 説教, 護教書 etc.) に出現するものである。著者は, この方法が特にキリスト教において採用された歴史的事情を, ①世俗文法が “latinitas” を強調したことに対する対抗, ②旧約聖書と新約聖書との連続性を強調せざるを得なかった当時の教会の事情 (マルキオンらに対する反駁) に求め, その根底に在る考え方として, ①「名前=〈もの〉の本質を表現するもの」(cf. *Gen.* 2. 19) という考え方や, ②「命名=再創造」というヘブライの言語論からの帰結としての「〈言語〉の起源の探求=〈創造〉の起源の探求」という考え方, あるいは③いわゆる「ロゴス・キリスト論」の考え方を指摘する (pp. 82-91)。

この一連の記述で評者にとって特に興味深かったのは、ヒエロニムスらが主張する「3つの聖なる言語」*tres linguae sacrae* の説である。この説によると、墮落以前の人間が有していた「完全な言語」はヘブライ語にほかならず、神は聖書がヘブライ語からギリシア語へ、ギリシア語からラテン語へと翻訳される際に自らの意志を言語の転移によって減ずることなく完全な仕方では伝えるとされ、そしてこの考え方が、教父たちにおける「ラテン語からギリシア語やヘブライ語への *etymologia*」を支える論理的根拠とされた、という。評者は、この考え方を読んで、いわゆる「聖書の靈感説」なども、この観点からもう一度歴史的に捉え直してみる必要があるのではないかと思った。

さて著者は、以上の記述の後、この“Sacred Onomatics”を採用した教父としてアレクサンドリアのクレメンスとオリゲネスを取り上げる (pp. 91-100)。この部分の記述では、オリゲネスが、民族と言語の多様性を罪の結果（バベルの塔）とみなし、キリストの受肉と復活を「言語の再統合とそれに基づく *onomastica* の開示」のできごととみなす考え方 (p. 94) が特に興味深かった。

以上の議論に続くアウグスティヌスとヒエロニムスの言語論の対比的な記述 (pp. 100-118) は、本書の白眉ともいえるものである。これまでの記述から明らかな通り、ヘレニズムの時代からローマ帝政末期に至る時代には、言語に対する“*etymological*”な態度と“*technical*”な態度とが緊張関係において並存しており、時代や場所、あるいは著作家が置かれた状況によってそれらのいずれかが表面に現われていたが、著者は、アウグスティヌスとヒエロニムスをもこの緊張関係にあった思想家として捉える。そして、著者はアウグスティヌスを“*etymologia*”を原理的に否定した思想家として、またヒエロニムスを“*etymologia*”を肯定した思想家として位置づけるのである。

アウグスティヌスは、*De magistro* や *De doctrina christiana* の中で、「〈ことば〉によって〈ことば〉を説明する」という態度 (= *etymologia*) のはらむ根本的問題性を指摘している (e. g. *De magistro* 2. 4)。彼によれば、このような態度は、¹人をして〈ことば〉の世界の中に閉じこめ、本来〈ことば〉の認識に先行する〈もの〉の認識から人を途絶させてしまう。〈ことば〉の認識を媒介としての〈もの〉の認識への上昇は、〈ことば〉を契機として生起する「内なる教師」*magister interior* や「内なる真理」*veritas interior* の「照明」*illuminatio* によって初めて可能となる。自らの眼前にテキストや注解書や参考図書が与えられているからといって、そのことが

テキストの理解を「自動的に」保証することにはならない。テキストの理解のためには、それらの書物を契機とする「〈ことば〉を超えたもの」の働きかけが必要なのであり、その意味でアウグスティヌスは、テキスト解釈の場における注解書や参考図書役割を——原理的に——否定したことになるのである。

これに対して、ヒエロニムスは、解釈原理としての“etymologia”の意義を認めたという点でアウグスティヌスと対照的な立場に立つ。彼は、一方でアンティオキア学派の technical で字義的な解釈の伝統に立ちながらも、他方で、前掲の“tres linguae sacrae”の教説を承認し、“etymologia”の積極的意義を認めた解釈理論を展開した。すなわち彼は、テキストに現われる〈ことば〉を〈ことば〉によって説明するという手続きや、特定の単語の語源を神話等の外からの規範によって解明する手続きに対して積極的な意義を与えたのである。そしてこれらの手続きとその成果は、ヒエロニムス以後、テキストに対する“gloss”として次第に蓄積されて行くことになる。そしてこの“gloss”がテキストを離れてアルファベット順に並べられたときに成立するのがいわゆる“lexicon”であり、さらには、これらの“lexicon”に対して etymological な説明を中心とする様々な説明が付加されて行くときに成立するのが、一般に“encyclopedia”と呼ばれるものなのである (p. 118)。

本書の第3章：Isidore of Seville and the Etymological encyclopedia では、このような経緯の下に成立した Isidorus の *Etymologiae sive origines* が取り上げられる。ヒエロニムスの聖書翻訳 (Vulgata) と聖書注解書以降、聖書解釈の原理としてはヒエロニムスの解釈方法が圧倒的優位を占めるようになり、彼以前の解釈方法は歴史の背後に退くことになるが、このような“etymological grammar”を他のあらゆる学 *ars* の基礎学として据え (p. 158)、様々な文学ジャンル (*prosa, metra, fabula, historia, argumentum, etc.*) の起源をここから説明し、この理論を根拠として *rhetorica* や *dialectica* (pp. 158-165)、さらには *musica* や *arithmetica* (pp. 165-172) の新たな位置づけを行なおうとしたのが Isidorus の *Etymologiae sive origines* であった。

そして著者は、続く第4章：The Text of Early Medieval Grammar で、このような etymological な *grammatica* や *encyclopedia* が、その後キリスト教的「召命」*vocatio* の概念とどのように結びつき変容して行ったかを、Bede (673-735)、Julian of Toledo (d. 690)、Tatwine (d. 734)、Virgilius Maro Grammaticus (d. c.

636-) などの実例を通して述べ (pp. 177-207), その結果として, 紀元8世紀の Alcuin の頃になると “technical grammar” と “encyclopedia” と “dialectica” との間に新しい——中世的な——関係が成立したことを述べることによって本書を締めくくっている (p. 207 ff.).

以上われわれは, 本書の内容を, 特に第2章を中心に概観した. 評者が本書を読了してまず感じたことは, 本書が古代末期から初期中世にかけての新鮮で一貫した視野を与えてくれるきわめて刺激的な書物である, ということである. 著者は, 単純な《ヘブライズム—ヘレニズム》の図式や《異邦宗教—キリスト教》の図式では割り切れないこの時代の歴史を “etymological grammar” と “technical grammar” との緊張関係という一貫した視点から見事に描き出して行く. その記述はきわめて示唆に富んでおり, 読者は, 教父の聖書解釈や言語理論の問題についてはいうに及ばず, いわゆる「普遍論争」などにおいて顕在化してくる言語と実在との関係の問題, さらには “sententiae” や “summa” といった「神学方法」の問題に関しても, 様々な新しい示唆を与えられるに違いない. 評者は, 本書を読んで, 自分の研究を改めてこの視点から捉え直してみる必要があることを痛切に感じた. 要するに本書は, 中世哲学の様々な局面に新たな眺望を与えてくれる書物ということができよう.

けれども, 本書は決して読みやすい書物ではない. 著者の英語は, 著者独特の言い回しなどもあって極めて難解であるし(評者は著者が頻繁に用いる “discursive strategy” という語のニュアンスを最後までつかむことができなかった), また読者の予備知識を前提にした圧縮された議論は読者をかなり消耗させる. さらには, 本文の中に頻繁に引用されるラテン語テキストは——英訳が付加されているものの——しばしば本文と無関係のように思われて読者を困惑させる. また著者が本書の中で用いる様々な概念 (“strategy”, “discourse” etc.) についても, 著者がこれらを思想的に十分吟味して用いているのかどうかの疑念を禁じ得ない箇所も若干見受けられた (あるいは著者は, 本書を歴史家の立場で執筆しているのかもしれない). しかし本書のもつこのような欠点は, 本書がわれわれに示唆してくれるものに較べるならば, むしろ小さなものというべきであろう.